あの手 この手 編

磯野 いちご

その１． あの手この手：メール編

朝メール
「会社に着きました。仕事始めています。今日も一日頑張りましょう。」

昼メール
「今日は食堂でラーメン食べました。午後も頑張りましょう！」

夜メール
「出ました！」

そんな報告メールが続いて何年か経つ。

幸せじゃないわけじゃない。
きっとこういう静かな日常が続く事が幸せなんだと思う。

でもそんな日々に孤独を感じずにはいられなかった。

そんなある日、朝の報告メールに対して彼に、小説調の書き出しでメールをしてみた。
ちょっとした出来心で、ただ楽しみたかっただけだった。

書き出しはこう、、、

何も変わらない日常が続くある日の事、彼からメールがきた…
いつものお昼の報告メールかと思ったらクリスマスのデートのお誘いだった。

返信は、、、
『？？何だって？　クリスマスデートのお誘い！？』

かまわず先を続けてみた

まだクリスマスには早いけど、、、彼女は嬉しくて何度も携帯をみては微笑んだ
詳細は秘密らしい

返信なし

気にしてくれた彼の優しさを噛み締めながら
１日１日クリスマスが近づくのが楽しみになってきた

返信なし

そうだ！私も尚也に何かサプライズをしよう…イタズラぽくほくそ笑み
おでこを人差し指で叩き始めた、、、こんこん　こんこん　それは彼女が何かを
考える時のいつものポーズだった。

返信なし

何度かこんこんとおでこを叩いたものの
サプライズのアイデアではなく、
デートの誘いメールに対しての彼への愛しさがだけがただ沸き上がってきた
彼女はそのまま彼が働く品川へ向かって新幹線に乗り込んでいた。

返信なし

当然メールの中だけの話で乗り込んでなどいない
それでも続ける

会いたい！衝動的なその感情は抑えることが出来ず
彼の顔を見て心地の良い声や彼の匂いを間近で感じたかった

返信なし

新幹線で向かいながら
『仕事中なのに…来ちゃったの？』そう言って少し困った素振りを見せながらも
はにかむ彼の顔が浮かび、白い息を横目に駅のホームの人混みの中急ぎ足で

彼の働くオフィスビルの前まで来た。
冷たい冬の気候にも関わらず、
心は温かい何かに包まれるようで幸せな笑みが自然とこぼれた。

そしてやっときた返信はこうだった
『クリスマスの飾り付けやろうね〜！』

負けてたまるかと、先を続ける

何か欲しいものある？そう尋ねてきた彼に
一瞬言葉を詰まらせる彼女

またしてもこんな返信
『熟慮しておるのぉ』

何が欲しいなんて言わなくても気づいて欲しい…
長年の付き合いでそんな願いは叶わぬ夢だとわかっていても
女心はそう求めてしまう

返信なし

急いで手頃な欲しいものを探してみる…
あーそうだ！エスプレッソ用のデミタスカップ
お揃いのがいい！
彼女は彼と過ごす静かな休日に優雅な気分になれるアイテムをお願いした。

返信があった
『デミタスカップね！お揃いのいいね〜』
そして昼メール
『食堂でチャーシューメン＋おにぎり１個食べましたぁ』

現実に引き戻されてちょっとだけむくれた彼女は

ただ、ただ、

ブー！

とだけ返信した。

これで、ここ何年かみたいにクリスマスに手ぶらで帰ってくるなんて事はないかな？
そう期待したい、、、彼女は半ばあきらめながらもそう思った。

つづく

奥付

「　スプーン１杯分の出来心　」
「あの手 この手」編
著者 : 磯野いちご
制作　2013.11.25 より